

(始良郡横川町中ノ中尾田)

位置と環境

遺跡は町の中心部からほぼ東に約500m離れた、標高210～220mの台地の先端部に位置している。遺跡のすぐ南側を流れる天降川との比高差は約50mあり、この川沿いに広がる町の中心部を一望できる場所に遺跡は立地している。

調査の経緯

九州縦貫自動車道の建設に伴い、昭和54年(1979)から昭和55年にかけて、9,800㎡を対象に県教育委員会によって発掘調査が行われた。

遺構と遺物

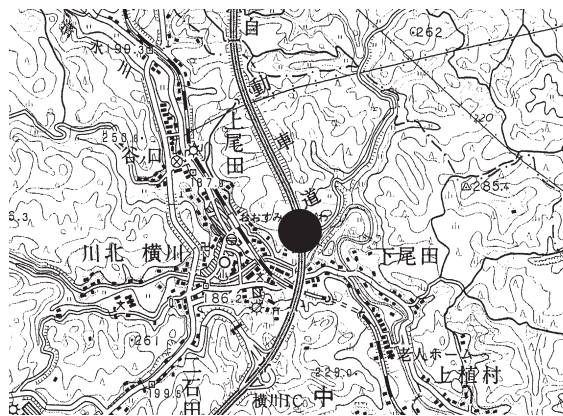
調査の結果、縄文時代早期・中期と中世の時期を中心として、ほかに古墳時代の土器や近世の墓などが確認されている。

縄文時代早期は、多種多様の土器とともに炉跡や集石などの遺構が確認されている。

炉跡は3基確認されている。そのうちの1基はその形態や床面の状況から、少なくとも4回の拡張あるいは移動しての使用が考えられる。最終使用の段階は楕円形の形が想定され、中には木炭片の混ざった黒土が入っており、焼けた角礫が無造作に投げ込まれたような状況であった。ほかの2基はいずれも円形で、すり鉢状に掘り込まれている。中には木炭粉末の混入した黒土が入っており、焼けた角礫が混在している。

集石は10基確認されている。このうち5基は掘り込みがあるが、残りについては見られない。掘り込みのある5基のうち、3基については底面および側面に平らな石を敷いており、その上に角礫が散在している状態であった。礫は焼けているものもあった。集石の中には時期を特定できるような遺物は確認されていない。

遺物は、多量の土器や石器のほかに軽石製品などが出土した。土器はその文様の特徴から貝殻文系、撚糸文・縄文系、押型文、その他に分けられる。貝殻文系の土器は、大分県の政所遺跡出土のものに類似するもので口縁部外面に貝殻腹縁により連続した



第1図 中尾田遺跡の位置

刺突文を施すもの、口縁部外面に貝殻腹縁により連続した刺突文を施し、胴部には貝殻条痕文を施すもの(石坂式)、器面に櫛描文を施すもの(桑ノ丸式)などがある。撚糸文・縄文系の土器には撚糸文を施すもの、網目状の撚糸文を施すもの、変形撚糸文を施すもの、縄文を施すものなどがある。撚糸文の中には円筒形の器形があり、網目状の撚糸文の中には壺形の器形も存在する。押型文土器は山形押型文、楕円押型文、菱形押型文、同心円文押型文などがある。そのほかの文様は、みみずばれ状の微隆起線文を施すもの、櫛描状の沈線文・円文を施すもの、刺突連点文を施すものなどがある。撚糸文・縄文系土器、押型文土器、その他の土器のほとんどは、器形が胴部で「く」字状に屈曲し、口縁部が外反するもので、手向山式土器である。石器は石鏃、石匙、石斧などが出土している。軽石製品として、楕円形に形を整え、中央に穴をあけた装飾品と考えられるものが出土している。

縄文時代中期は多量の土器とともに、炉跡や土坑が確認されている。

炉跡は3基確認されたが、埋土はいずれもアカホヤ火山灰層が中心であり、焼けて赤褐色になっている部分もある。土坑は1基確認された。中から凹線文の土器片が1点出土している。土器は指先状のもので直線や曲線を施文した阿高式と呼ばれる土器を中心に、並木式土器と呼ばれる、凹線文の間に押引文やヘラによる沈線文を施した土器が出土している。ほかに宮崎県串間市の大平遺跡から出土した大平式と呼ばれる土器で、口縁部が肥厚し、この部分に棒

状のものやへら状のものにより文様を施した土器が出土している。阿高式土器の中には中九州の西海岸を中心に出土するものと同様に胎土に滑石と呼ばれるやわらかい石の粉末を混入しているものもある。また、土器の底部には鯨の脊椎骨を回転台として使用したときの圧痕がついているものがある。石器は約70点の石鏃や石匙、石斧、磨石・敲石などが出土している。

中世の時期は、山城に伴う遺構や遺物が中心である。調査区の中央に幅約10m、深さ約8mの掘り切りが確認されている。この掘り切りの掘り下げ途中に、これと直交するように隧道が構築されていることが判明した。隧道はほとんどが陥没していたが、断面図からの復元によりトンネル状であったことが明らかになった。また、掘り切りの東側には土塁が存在していたことも確認された。中央の掘り切りの東側は階段状に郭が形成され、それぞれの郭内に掘立柱建物跡や柵列・土坑・排水溝などの遺構が発見された。西側は空堀と柵列が発見され、これによって郭が区切られるもので、東側とは構築方法の違いが見られた。この郭内に掘立柱建物跡や土坑が確認された。北側の基部には堀が廻り、その外側には腰



写真1 山城の隧道断面

郭状の傾斜面の遺構が確認された。南側の傾斜面および平坦部はシラス取りや宅地造成などにより破壊され、下半部には遺構は確認されなかった。中腹には堀が確認され、さらにその上部には堀状の登道が見つかっている。

遺物は、青磁、白磁、土師器、備前焼、常滑焼、瓦質の播鉢や火舎、滑石製の石鍋などが出土している。ほかに、隧道内の流入埋土の中から漆塗りの木製品とそれに装飾された金銅製の金具が出土した。これらの遺物の時期は鎌倉時代中期から後期と室町時代前半のものがあるが、その使用時期の推移を知る遺構・遺物の関係は把握できなかった。

特徴

縄文時代早期の手向山式土器は、各遺跡でそれぞれ出土していたものが、本遺跡ではさまざまな文様形態をもつものがまとまって出土した。縄文時代中期においては、阿高式土器は中九州の西海岸を中心に分布していたが、鹿児島県内の山間部にもこの土器を中心とする遺跡の存在が確認されたことは大きな成果といえる。

山城の調査は全体からみると一部の区域であるが、中央の掘り切りと隧道はセットになっているものと考えられ、山城の防備の機能に加えて通路としても重要な役割を果たしていたと想定される。各郭の調査ともあわせて、当時の山城構築の重要性を知る手がかりを得るものであった。

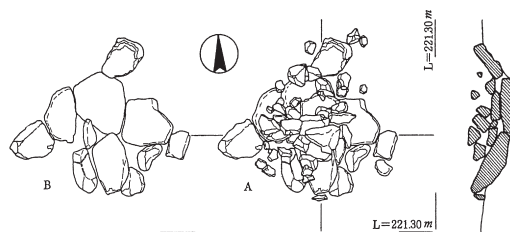
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

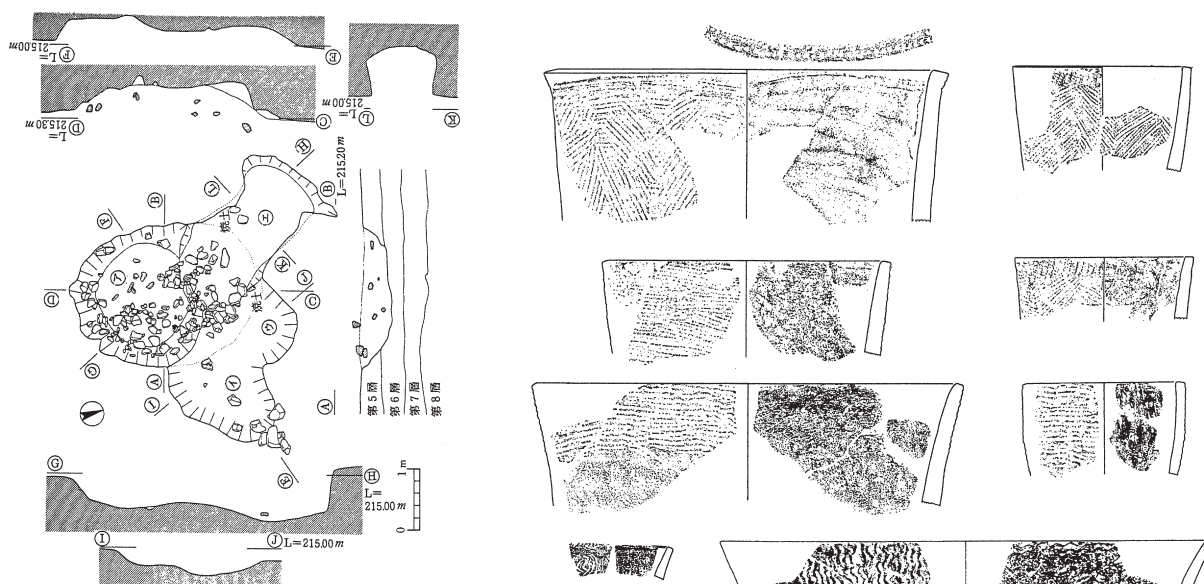
参考文献

鹿児島県教育委員会 1981「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』15

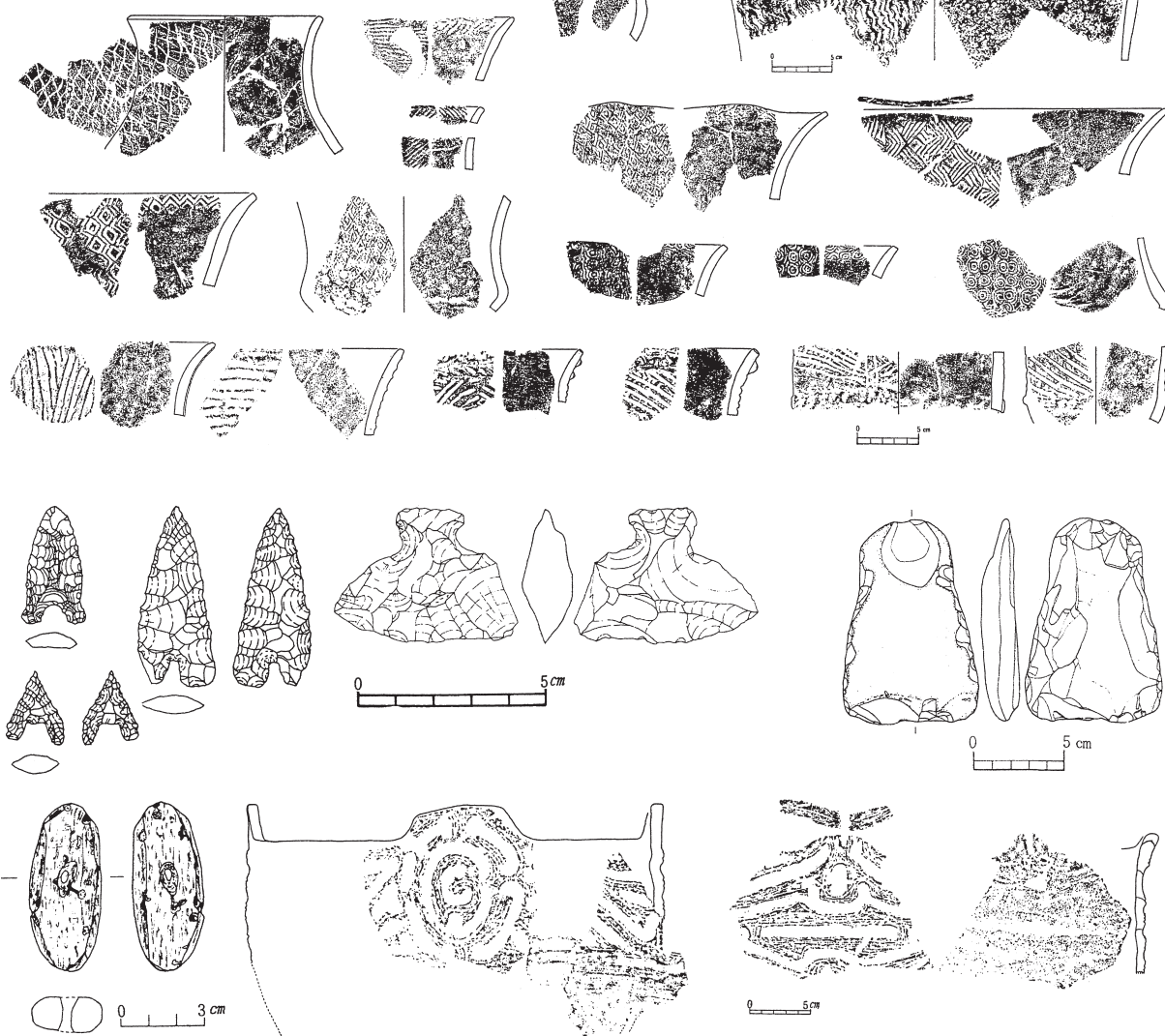
(井ノ上秀文)



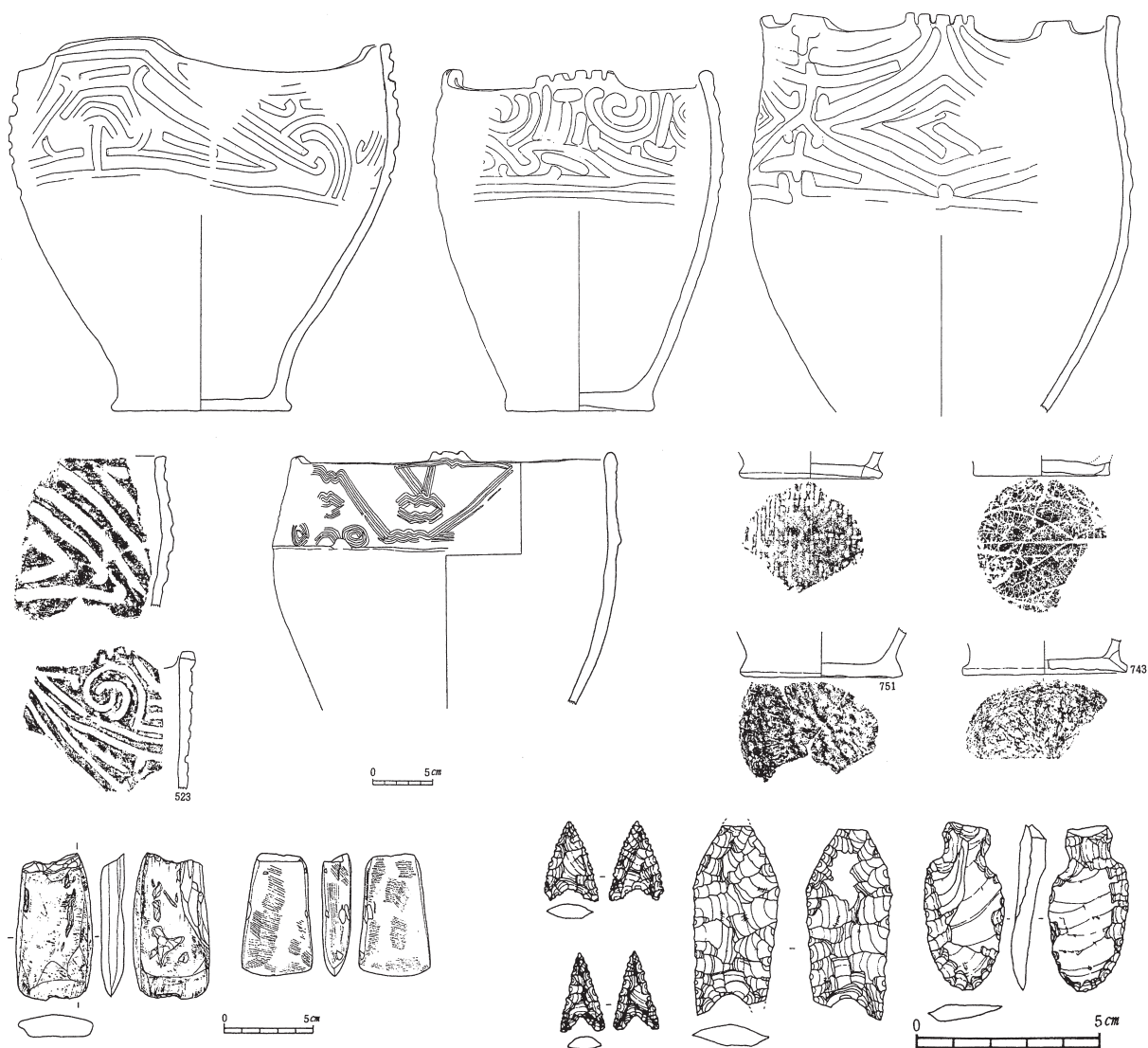
第2図 早期の集石



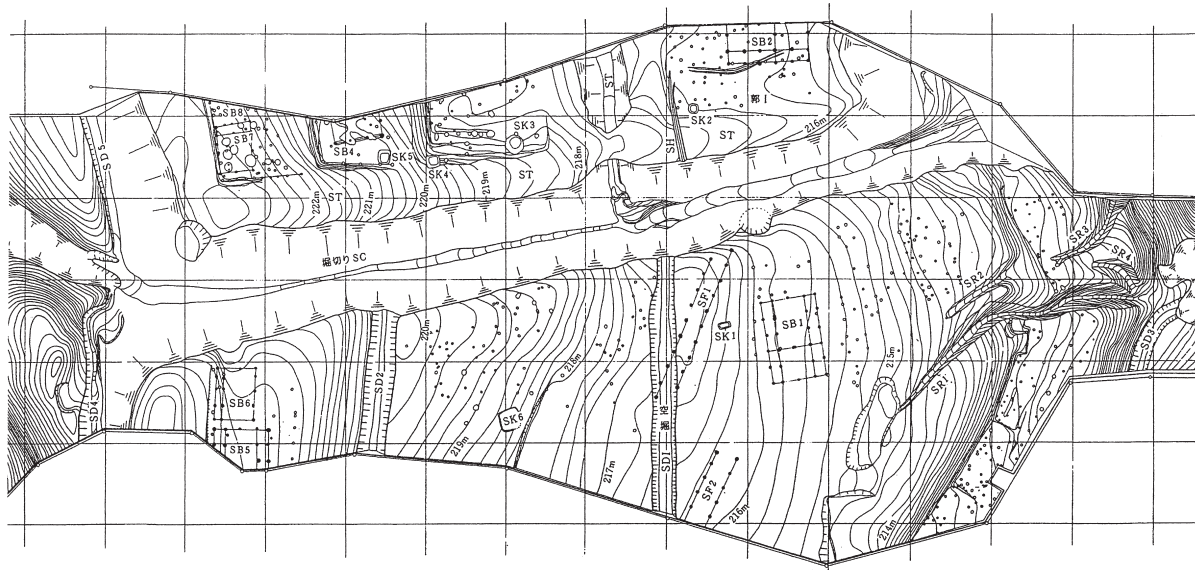
第3図 早期の炉跡



第4図 出土遺物 (1)



第5図 出土遺物 (2)



第6図 山城の遺構配置図